＃子育て処方せん

腎臓の病 早期発見へ

福岡市立こども病院の医師が子どもの病気や健康に関する情報を伝える「＃子育て処方せん」。今回は、腎疾患科長の郭義胤（かくよしつぐ）医師に、乳幼児・学校健診で行われる検尿の意義や、そこから分かる腎臓の病気について聞いた。

乳幼児・学校検尿

腎臓は、血液中の老廃物や毒物を尿として排出する重要な役割を担っている。ただ、病気になっても自覚症状がないことが多く、肝臓と同様に「沈黙の臓器」と呼ばれる。血液検査でも初期には異常が見つからないことが多く、検尿は腎臓の異変を早期に察知することができる有効な検査方法だ。

検尿で見つかる病気の代表例がIgA腎症で、日本人に多いとされる。腎臓内の糸球体が炎症を起こし、腎機能が徐々に低下していく。血液中のたんぱく質や赤血球などが尿中に漏れ出るが、痛みなどの症状を感じることはない。顔のむくみや血液の異常が生じる頃には重症化している。

一度失った腎臓の機能は元に戻らない。初期の段階であれば、炎症を薬剤で鎮めるなどして、腎不全などへの進行を防ぐことができる。定期的な検尿で、たんぱく尿や血尿を早期に発見することが望ましい。

郭義胤医師

学校の検尿では、小学生で0・5％、中学生で1％ほどの児童生徒に何らかの異常が見つかる。精密検査を受けてもらうと、このうち半数近くに病気が見つかる。だが、検尿で異常を指摘された小学生の約3割、中学生の約4割が精密検査を受けていない。

「寿命は腎臓が決める」とも言われる。若い頃から腎臓の機能を維持しておくことが、老後まで元気に過ごす鍵となる。子どもたちや保護者の皆さんが忙しい朝に採尿やその手助けをするのは大変だと思うが、ぜひ検尿を行ってほしい。我々も異常が見つかった際の受診の必要性を周知するよう努めていく。

（聞き手　大森祐輔）

「沈黙の臓器」有効な検査

小さな赤ちゃん 成長の記録冊子

配布する自治体広がる

佐賀県のＬＢＨを手にする江口さん

小さく生まれた赤ちゃんの成長を記録する小冊子「リトルベビーハンドブック（ＬＢＨ）」を作成する自治体が増えている。主に1500㌘未満で生まれた子どもと親のための冊子で、ＮＰＯ法人「ＨＡＮＤＳ」（東京）によると、2018年度に静岡県が配布を始め、24年4月までに秋田県を除く46都道府県に広がったという。

佐賀県では、当事者のサークルの呼びかけで県が21年に発行した。代表の江口玉恵さん（42）も、12年に生まれた息子の体重が1458㌘で、新生児集中治療室（ＮＩＣＵ）に約40日入った経験がある。通常の母子健康手帳は「手足をよく動かす」などの質問に「はい・いいえ」で回答する形式。江口さんは「『いいえ』ばかりを書き込まねばならず、つらかった」と振り返る。

佐賀のＬＢＨは静岡などの前例を参考に作成し、1500㌘未満で生まれた赤ちゃんの身長や体重を記録できるグラフを掲載。「頭を一瞬持ち上げる」「おもちゃを他方の手に持ち替える」といった成長や発達は、確認できた日を書き込む形式にした。

当事者の体験談やメッセージも多数紹介して「自分を責める必要はない」と親たちに寄り添う。江口さんは「同じ悩みを持つ仲間はたくさんいると知ってほしい」と話している。

「＃子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syaka1@yomiuri.com）へお願いします。

インタビューの動画はＱＲコードを読み込んでください